

いやさか通信

(※「いやさか」とは、「栄える」という意味を持つ「弥栄」を平仮名で表記したものです)

年齢	R2.9末(前月比)
0歳～14歳	487人(-1)
15歳～64歳	2,397人(+1)
65歳～	1,882人(-3)
合計	4,766人(-3)

弥栄町の人口

提言書を提出

弥栄町区長連絡協議会では、弥栄町の現状と課題を市と共有し、地域の意見や方向性が市の施策に効果的に結びつくことを願い、区長会としては初めて京丹後市長に提言書を提出しました。

市長と区長会三役さんとの懇談では、提言書の3本柱である「自然災害に強いまちづくり」や「暮らしの基盤となる安心安全なまちづくり」、「コミュニティを主体としたまちづくり」について意見交換を行いました。



左から中山市長、会長の入江さん、副会長の梅田さん、会計の廣谷さん

環境美化ボランティア

弥栄町区長連絡協議会では、平成30年度から通年で水辺公園の美化活動を行っています。今年は10月15日に実施され、区長会だけでなく、



参加された皆さん

周辺福祉施設の職員の皆さん、高校生や地域の皆さん等、約40名の方が集まり、公園内の草刈りや芝桜の補植作業が行われました。作業中には、「頑張ってください!」と下校途中の児童から応援が送られることもあり、和やかな雰囲気の中で作業が行われました。

活動に参加した京都府立清新高等学校の生徒からは「普段できないことに参加できて楽しかった」「地域の方と交流できて楽しかった」「今後このようなボランティア活動があれば参加したい」と感想がよせられました。

冷たい風が吹く中、参加した皆さんは熱心に作業に取り組み、雑草が生い茂っていた公園は、約1時間の作業で見違えるほどすっきりし綺麗になりました。

地域で頑張っている方を紹介します

「野間をベースに地方を盛り上げたい」と話すのは野間地区出身の三本 大介さん。三本さんは、これまで医療・介護の経営コンサルティング会社で働き、全国各地を飛び回っていました。

そうした中、経営改善のため地方の企業が抱える根本的な経営課題の原因を探ると、人口減少や少子高齢化により衰退した地方では、人材不足等により根本的な解決には至らない現状を知りもどかしさを感じたそうです。

そこで、地方を元気にしたいと奮起し、今年4月に独立して野間を拠点とした㈱リバイタライズジャパンを立ち上げ、地元農産物の販売やイベントの企画を行うなど、地域の活性化を目指しています。

まず三本さんは、自然豊かな野間地域の綺麗な水で作られているお米に着目し、野間のお米のブランド化に取り組みました。主に都市部の個人や飲食店をターゲットに販売しており「この活動が地域の皆さんの自信に

繋がりを、野間地域が注目されるように頑張りたい」と話されていました。

その他にも地域の活性化を図るため、「丹後で過ごした楽しい時間や思い出のワンシーン」をテーマに「NO TANGO, NO LIFE 2020」という写真コンテストをSNSで開催しています。応募作品はすでに300枚を超えており、三本さんは「コンテストを通して丹後と地元企業の魅力を発信し、丹後のすばらしさを再発見してほしい」と話されていました。

三本さんは前職のコンサルティングも行っており、全国の病院や施設を対象にした経営改善にも取り組んでいるそうです。



三本 大介さん 持っているのは販売中の野間のお米